

佳作

## 漂う私、新しい私

鹿児島県 龍郷町立龍南中学校一年 五代 奏海

クラゲには脳も心臓もないらしい。

水流に沿って海中を漂い、浮遊する。

まるであの頃の私みたい。

私には、空白の二か月がある。

小六の春。母と二人でこの島に引越してきた。喜び勇んできたはずだったが、登校三日目にして、私が思い描いていた青写真は、見事に打ちくだかれてしまった。

これまでとは百八十度違う密な関係性の中で、常に誰かに見られているような緊張感。流れに身を任せ、都合よく集団に溶け込みながら過ごしてきた私は、この環境に強烈な違和感と息苦しさを感じたのだ。

教室に上がることが苦しくなった私は、別室登校となった。対応してくれた大人たちには、俗に言う「子どもらしくない子」に映っていたと思う。時に学校のシステムやきまり、社会全体に対する不満や

疑問を述べ、また時には答えのない問いばかり発していたからだ。

それでも、決して否定することなく、肯定的に受け止めてくれたし、何より一人の人間として大切にしてもらえている気がして、心が少しずつ少しずつほぐれていくのを感じた。

ある日、

「奏海さんで、クラゲみたいだね。」

と言った人がいた。前の学校での自分の立ち位置や、振る舞い方を聞いての感想らしい。「なるほど、言い得て妙だな」と思った。これまでは、流れに身を委ね、海中を漂うクラゲのように浮遊し、受動的に生きることが許されていた。クラゲみたいな自分も嫌ではなかったが、さすがにずっとクラゲのままでもいられないなとも思った。では、何になろう。

あれこれ考えていたら、興味深い事実に出会った。クラゲには脳も心臓もないらしい。その代わり、体中に神経細胞が張り巡らされていて、水流や何かに当たった時などに反射的に体が動くのだそうだ。そうか、きっと今の私は、この神経細胞が活性化していて、さまざまな物事を敏感にキャッチしているのかもしれない。そう考えると、クラゲのままでも悪くないんじゃないかと思った。

別室登校は二か月に及んだが、三月には仲間と共に笑顔で卒業した。学校や社会への不満や疑問がきれいさっぱりなくなったわけではない。しかし、この二か月の中で、変わりたい自分、変えたくない自分にどっぷり向き合うことができたし、特別何かをしなくても、できなくても、受容してくれる人がいることや、違った角度で物事を見ることの大切さ、面白さを知った。空白の、でも決して忘れられない二か月で得た私の新しい武器だ。

島での二回目の春。私は、中学校という新たなステージに立った。相変わらず私の神経細胞は、さまざまな物事を忙しくキャッチし続ける。でも、新しい武器を手に入れた今の私なら、きっと乗り越えていけると確信している。クラゲのように自由に浮遊しながら。